学　会　記　事

第46回新潟救急医学会

日　時　平成15年7月12日（土曜日）
午後1時00分～
会　場　有壬記念館　2階

Ⅰ．救急隊関連部門

1　小児虐待を疑った1症例

斎藤　和夫
新潟市西消防署

今回暴行による幼児死亡事件に出動した救急隊の視点から児童虐待について考察した．

1歳6ヶ月の女児，状態はCPA．保護者の矛盾する説明，服の汚れ，身体各所の打撲痕等から虐待を強く疑った．虐待事例では，保護者が事実を隠そうとするため情報が乏しい．身体観察，環境観察から虐待を疑うことも必要であるが，けっして問い詰めたり，犯人扱いするような言動はすべきでない．救急隊に対する無視，反感の感情を排し無用な混乱を防ぐ．新潟県の児童相談所における虐待相談処理件数はこの5年間で10倍の増加である．児童福祉法，児童虐待の防止に関する法律により，虐待児の通告義務，早期発見の努力義務が規定されている．新潟市では，地域の児童虐待防止ネットワークが構築されており情報提供が子供の救命につながる．観察における的確な身体所見の把握，迅速な処置，情報収集能力について常に感性を磨くことが救急隊の使命である．

2　小学6年生への心肺蘇生法講習会の取り組みアンケート調査結果について

川井　桂・吉川　恵次・渡辺　正友
原田　美江・行田　祐樹・江口　純子
新潟医療技術専門学校救急救命士科

本校救急救命士科2年生は，「9月9日救急の日」に小学6年生への心肺蘇生法講習会を実施している．この取り組みは教育的効果を本校学生と小学6年生の双方に期待するものであるが，これを明らかにすべく，本校学生および小学6年生を対象にアンケート調査を実施した．

学生は，講習会を通じて心肺蘇生法に関するより正確な知識・技術の必要性を改めて認識するとともに，教える事の難しさ，小児への接遇を体験的に学習できた．一方，小学6年生は心肺蘇生法の知識・技術を学びながら生命の尊さ，助け合う事の重要性について学習できた．

さらにアンケートから，蘇生法の教育は心身の発達と共に，年齢にあわせた技術・知識を小中高で一貫して学習していく事がもっとも効果的ではないかと考察された．この意味では，講習対象を小学6年生としたことはまずは妥当であろうと考えられた．

アンケートでは，小学6年生の約50％が「心肺蘇生法ができるようになった」と回答したが，小学生の心肺蘇生法習得について正しく評価する方法を検討することが課題と考えられた．

3　長岡市における応急手当講習の状況と効果的な普及活動について
― 参加者アンケートの実施結果から ―

伊津　靖夫・小西　和則・安達　哲浩
野村　栄行
長岡市消防署

【目的】

長岡市消防本部では，「普通救命講習」と「一般講習」の2種類の応急手当講習を救急隊員が中心となって市民に行ってきたが，心肺停止患者に対するバイスタンダーCPRの実施は，24.2％と低い状況で増加が見られず，救命率の向上につな

がっていない.

「的確なバイスタンダーの養成」を行うための効果的な普及活動について探ることを目的に，応急手当講習会参加者に講習終了後アンケート調査を実施したので，その結果に考察を加え報告する.

【アンケート調査等】

設問は,「受講者の参加意欲」,「講習実施後の修得度」,「バイスタンダーとしての意識付けの度合い」等9項目について行い，講習受講者718名から回答を得た.

【考察】

アンケートから把握された講習会の問題点等

・講習会参加者の意欲，修得度の自己評価，バイスタンダーの意識付けは両講習会とも全く差がなかった.

・普通救命講習では，同講習受講経験者が29％あり，受講後の再講習についても，ほぼ全員が希望しており，積極性が見られた.

・講習指導員は，一般講習での実技修得に疑問を示し，普通救命講習の効果を感じていた.

効果的な普及活動についての対策

・普通救命講習の促進

・普通救命講習の広報の強化

・一般講習受講者に対する普通救命講習受講への動機付け

・一般講習の一定期間内連続受講のプログラム化とその格付け

4　救急搬送された関係者から見た救急隊員の接遇について

早川　信幸・五十嵐　修・佐藤　博之
長岡市消防署

【はじめに】救急業務の改善のため，救急要請する関係者の意識を探り，救急活動を円滑に行うための救急隊員の接遇について調査を行った.

【方法】平成14年8月から12月の5ヶ月の救急搬送の約5％を対象に，到着時の印象から搬送中の活動内容等について接遇面を中心にアンケート調査した.

【結果】期間中の2116件の救急出動中4.5％96名へアンケートを郵送し，70名回収率73％から回答を得た．救急隊到着時の印象は良好であったが，処置の説明は約半数にしか伝わっておらず，関係者の救急隊員に対する印象は応急処置，病院選定，搬送の時間とともにやや低下していた.

【考察】救急活動では，①患者・関係者の理解度を確かめながらの活動　②相手の要求の把握　③必要な情報の収集　の観点から救急隊員の接遇が重要であり，平易な言葉づかい，適切な声掛け等による十分な説明を，活動隊員の誰もができるよう訓練しておく必要がある.

5　長岡赤十字病院における2002年度大規模災害発生時のシミュレーション
― 傷病者の所在の明確化と部門間の連携 ―

八百板あい子・目黒　信子・小林　洋子
長岡赤十字病院救命救急センター

当院では多数の傷病者が来院した場合のシミュレーションを1998年より実施している．2001年度のシミュレーションでは，傷病者の氏名や所在が明らかにできなかったり，手術に搬送した傷病者がまちがっていたりという混乱があった.

今回は，正確に傷病者の動向を捉える事ができるように，傷病者一覧ボードを作成し傷病者の所在の明確化と部門間の連携に効果を上げることができた．傷病者一覧用紙はあらかじめ作成されており，災害発生時にボードに張って使用する．CT・手術・入院棟など作成されたマグネット版がある．そのマグネットの移動で傷病者の所在と予定がわかる.

傷病者一覧ボードの活用結果として，中重傷エリア担当の看護師82％が傷病者の所在が確認できたと答えている．検査・放射線部門より，結果を届ける際，所在の確認ができ有効だったと評価された．傷病者の所在，手術・入院予定の病棟などが一目で確認でき，傷病者を中心に部門間での連携が取りやすかった．傷病者一覧ボードより傷病者がリスト作成され，安否調査などの問い合わせに対応できるようになった.

今後の課題としては，タッグよりの氏名表示の